View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

第36回関西学院史研究月例会（二〇一二・六・一二）

Mastery for Service 100年
マスタリー・フォア・サービスの今日的意味

Ruth M. Grubel

皆の心に響き、実践されてきた“Mastery for Service”

“Mastery for Service”の今日的な意味というと、きっとそれぞれ異なる意見をお持ちでしょう。今日は、私が最近考えていることをお話させていただきます。

“Mastery for Service”は、学長の講演の中でも出てくるように、ベーツ先生がご自分で考えて関西学院のために提唱されたものではなく、もともとはマギル大学のマクドナルド・カレッジで使われていたモットーでした。けれども今、マギル大学のホームページを見ても、“Mastery for Service”という言葉は出てきません。どうして、遠い日本の学校でベーツ先生がその言葉を提唱され、それが皆の心に響いたのでしょうか。そして、その時だけではなく、なぜ百年経った現在でも“Mastery for Service”は関西学院に息づいているのでしょうか。きっとそれは関西学院が創立以来キリスト教主義をずっと大切にしてきたからだと思います。その土壌があったからこそ、“Mastery for Service”は皆の心に響き、受け入れられ、理解され、実践されてきたのだと思います。

なぜ生きているのか、学んでいるのか

私たちは皆、人間として生きる意味を考える時があります。なぜ、生きているのか。何のために存在しているのか。これは人間としての根本的な問いかけではないでしょうか。目標もなく毎日を過ごして、やがて死を迎えることほど悲しいことはありません。

キリスト教では、一人ひとりが神から命と賜物（才能、能力）が与えられていると信じています。では命と賜物をいただいた者として、私たちはどう生きるべきでしょうか。「自分は家族や学校のなかで出会う人たちとどう関わるべきなのか」「自分は世界で起こっていることや身近で起きていることにどのような責任があるのか」「そこに置かれた人間として状況をよりよくする責任があるのではないか」。このような問いを私たちはつきつめて考えるべきでしょう。そしてその答えを見出すために私たちは教育を受けます。学問や教育からの学びによって自分を知ります。また、様々な人や新しいアイデアに出会い、対話し、刺激を受けることによって成長していきます。自分について考え、学び、広い世界を知ることが学びの喜びだと思います。そして、自分はどのように他者、社会と関わるべきなのかを考えて毎日を生きます。

人生の目標を見出す場としての関西学院

では、関西学院としては、これらの問いをどう位置づけているのでしょうか。二〇〇八年から始まった新基本構想プロジェクトのなかで、関西学院のミッションステートメントを作る使命が私たちに与えられました。ミッションステートメントは、大勢の人たちのご意見を参考にし、何度も書き直しながら作ったものです。その結果、百年間大事にしてきた、スクールモットー“Mastery for Service”を入れることによって、関西学院にしかないミッションステートメントになりました。

ミッションステートメントでは、人生の目標はとても大切であることを伝えています。関西学院に集うすべての人が、自分の人生の目標を見出せるよう導く、これには生徒・学生等だけではなく、教職員、同窓生、そして保護者の方たちも含んでいます。関西学院と出会うことによって、自分の人生の目標を考え、それを実現するために努力しながら生きていくということが、私たちの希望です。

関西学院には、生徒・学生等が目標を見つけるためのきっ

かけがたくさんあります。授業はもちろんのこと、チャペルアワーやキリスト教学もその例です。自分の目標を考え、今まで出会ったことのない学問に出会い、その刺激によって新たな目標が見えてきます。

成長していくにつれてその人のできる“Mastery for Service”は変化する

関西学院には、聖和幼稚園、初等部、中学部、高等部、大学、聖和短期大学、また千里国際高等部・中等部、大阪インターナショナルスクールがありますが、これらの学校にも、いろいろな“Mastery for Service”の形が存在しています。先日、初等部のチャペルに招かれて“Mastery for Service”についてお話をする機会をいただきました。小学生の場合、本を読める人はまだ読めない兄弟や友達に読んであげる、毎日出会う人に元気に挨拶をする、こういったことも“Mastery for Service”の現れで、小さな子どもでも一生懸命、自分らしい“Mastery for Service”を考え、実現することができるということをお話しました。幼稚園児、小学生、中学生、高校生、大学生、社会人と成長していくにつれて、その人が人生の中でできる“Mastery for Service”は変化していきます。

ベーツ先生の文書（『商光』創刊号、一九一五年）には「私たちは〝弱虫〟になることを望みません」とあります。ベーツ先生は、もしかすると、知識的にも精神的にも肉体的にも強い人を関西学院で育てたいと考えていたのかもしれません。しかし、私たちが持っている力を、自分らしいやり方で活かすことが、今日的な“Mastery for Service”ではないでしょうか。

私は、Masteryというのは完成することはないと思います。自分はまだまだエキスパートになっていない、Masteryできているとはいえないと怯んでしまうのではなく、たとえ身近な小さなことであっても、そのとき自分にできる“Mastery for Service”を実践する、そして生涯をかけてその姿勢で生きていく、これが現在求められていることだと思うのです。

必要なのは相手を愛すること、思いやること

“Mastery for Service”を実践するには、相手に対する愛情と思いやりが必要です。第2代院長の吉岡美国院長は「敬神愛人」という言葉をよく使われましたが、人を愛す

ることによって初めて本当の“Mastery for Service”が実現できます。真のServiceのためには、その人を愛することが必要なのです。「私はとても上手にできるからやってあげる」というものではなく、相手に愛をもって「できることを一緒にしましょう」という姿勢です。

私たちの周りにはあってはいけないこと、改善すべきことがたくさんあります。それを変革する責任が私たちにはあります。その責任を感じ、自分だけでは無理なら、共に協力して変革する、このことを関西学院で学び、実現していただきたいと思います。

みなさんの“Mastery for Service”は、どういう色・どういう形・どういう動きを持っているでしょうか。ぜひ、みなさんからもお話しいただきたいと思います。みなさんの“Mastery for Service”をできるだけ多くの方たちに知っていただくことによって、一人ひとりが、「私もこういうことができる」と考え、“Mastery for Service”がより広まっていければと願います。